

成果報告書

記入日 2018年 3月 20日

氏名 登尾 紗衣	渡航先国名 タンザニア	所属機関 ダルエスサラーム大学
研究テーマ： スワヒリ地域における異世界 —民間説話から考える—		
研究期間： 2017年 4月 ～ 2018年 3月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>採集した64話の民話とタンザニア人への聞き取り調査により、スワヒリ民話において、日常生活と切り離された異世界は存在しないが、民話の中で呪術師や精霊などが人々の暮らしの身近なところに登場し、現実世界でも存在していると信じられていることから、スワヒリ世界の異世界は、現実世界と密接に関わりあい、二世界間の境界は曖昧である、または区別がないことが分かった。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>研究方法</p> <p>書籍より採集したスワヒリ民話（スワヒリ語43話、日本語13話、英語8話）の中から、スワヒリ地域特有の「異世界」に関する描写を抜き出そうとしたが、「ジン（スワヒリ民話に登場する精霊）の国」が登場する話が一話見られた以外、特に現実世界から切り離されて存在する異世界は登場しなかった。その代わりに、登場人物たちが暮らす日常世界の中で、様々な不思議な存在（想像上の生物）が登場していることが分かったので、中でも登場回数が多かったムガンガ（治療師兼呪術師）、ムチャウイ（魔法使い）、ジン（精霊）、ジムイ（怪物、お化け）を取り上げ、物語上でのそれらの在り方、役割などを分析することにした。また、それらに対するイメージについて、現地に暮らすタンザニア人に聞き取り調査を行い、その結果を実際に採集したスワヒリ民話と照らし合わせることによって、不思議な存在の実像、それらに対する彼らの意識を明らかにしようとした。</p> <p>ムガンガ</p> <p>スワヒリ民話には、「ムガンガ」と呼ばれる治療師兼呪術師が登場する。彼らは不思議な術（ウガンガ）を用いて、時には人を助け、時には人を呪う。聞き取り調査の中では、ムガンガの特殊能力として、「動物などに変身できる」「精霊とコミュニケーションが取れる」等を挙げた人が多かった。中には「予知能力がある」という人もいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・治療師としての役目 <p>ムガンガの主な役目は治療することであり、この点において後述するムチャウイ（魔法使い）とは異なっている。「森の老婆」では、病に倒れた王妃を助けるために国中のムガンガが王宮に呼ばれ、「アブダラの幸運」では、姫の病を治すことができたムガンガには一生分の褒美が与えられるというお触れが出されている。治療に使われるのは、植物の草や根をすりつぶして沸かしたもの（「森の老婆」）や、森のすべての種類の木の葉を混ぜて作った薬（「アブダラの幸運」）などの自然薬である。</p>		

このように、ムガンガは自然薬を使う治療師としての一面を持ち、王族にまで信頼されている。

・呪術師としての役目

彼らの術（ウガンガ）は時に現実世界ではありえない奇跡を起こす。「奇跡の歌」では、池に沈められて殺された王子が、ムガンガの「斑点のない羊を殺し、その血を池に注げ」という指示によって、生きた状態のまま水の中から救出される。「泥から生まれたどろんこ娘」では、子供のいない女性が、ムガンガの指示通りに行動することによって、泥で作られた赤ん坊を手に入れている。

人助けを行う良いムガンガがいる一方で、邪悪なムガンガが登場する話も多い。「七色の鳥になった娘」に登場するムガンガは、主人公をいじめる継母に人を鳥に変える針を与えており、「七つの頭を持った蛇」では、ムガンガである主人公の父親が秘密の部屋で悪魔を飼っている。「ンカドゥダ先生と彼の生徒の話」は、先生に教えてもらったウガンガを使って詐欺を働き、裕福になる少年の話である。ムガンガは、不思議な術を使う呪術師としても、民話世界の中で大きな役割を占めている。

ムチャウイ

治療師としての役目を持ち、自身の力を人助けに使うムガンガがいる一方で、人を呪うことだけにその力を使う邪悪な魔法使い、ムチャウイが存在している。タンザニア人によると、「持っている能力はムガンガと同じだが、治療はしない」のがムチャウイである。治療師としての役目がないため、物語中では常に人々に呪いをかける悪役として登場する。「ツルになった王様」では、邪悪なムチャウイが王と大臣に魔法をかけ、ツルの姿に変えてしまう。「泥棒と争った魔法使い」では、主人公のブオラじいさんの村を夜な夜な荒らし、人々を困らせるムチャウイが登場している。

ジン

ジンと呼ばれる精霊が多く物語に登場する。彼らは人間にはない不思議な力を持ち、空を飛んだり、魔法を使ったりすることができる。善良なジンは人々に助言を与え、邪悪なジンは人々に害を為す。

・邪悪なジン

多くの場合、ジンは理由なく人を襲ったり、難題を仕掛けて人々を惑わしたりする存在として描かれている。「スルタンの子供たちと森のジン」では、森のジンが湖にやってきた王子たちに謎かけを仕掛け、それを無視して水を飲もうとした王子たちを次々に殺していく。また、「チャンジェ王の子どもとジンの子ども」では、旅の途中で水浴びをしていた姫の服を奪って姫に成りすましたジンの娘が、姫の代わりに婚約者である王子と一緒に王宮に帰ってしまう。

・善良なジン

また一方で、人々に助言や魔法のアイテムを与えて人々を助けるジンも登場する。「ユダヤ人の升」において、主人公はジンとの賭け事で窮地に立たされるも、高齢のはずなのに若く美しい女性の見た目をしたジンの助言によって難を逃れている。「ハッサンとフセイン」では、美しい姫とのチェスの勝負に負けて奴隷になってしまった弟ハッサンを助けるために、兄のフセインが奮闘する。彼はジンからもらった魔法の指環の力を借りて姫とのチェスの対戦に勝利し、弟を奪還する。

ジムィ

人々を脅かす怪物、お化けとして登場するのがジムィである。聞き取り調査をした中では、目に見えない、幽霊のような存在だという人がいる一方で、村一つを食べつくせるほど巨大な怪物だという人もいた。「現実世界では目に見えないが、物語の中では語り手がジムィに姿を与えることがある」「物語中のジムィの姿は語り手次第である」と教えてくれた人もいて、実際、「ビムィリとジムィ」の物語には緑色の肌の怪物の挿絵が添えられている。この物語では、三姉妹の末っ子ビムィリがジムィに攫われ、「歌う太鼓」として太鼓の中で歌を歌わされる。「わがままシモンジャ」では、父親に行くことを禁じられていた山で遊んだシモンジャが、最終的にジムィに殺されてしまう筋書きとなっている。タンザニア人によると、「ジムィの存在を信じている人はいない」が、「親の言うことを聞かなければジムィに殺される」というような物語を聞かせることによって、子供をしつけ、教育しているのだそうだ。

現実世界と民話世界の関わり

採集した民話の中には、異世界と呼べるような世界はスワヒリ民話の中には登場しなかった。その代わりに、ムガンガやジン、ジムィなどは、日常世界の中に登場する、人々の生活に割と身近な存在として描かれている。また、興味深いのは、それらが民話の中だけの存在ではなく、現実世界に実在している、または実在していると信じられていることである。

例えばムガンガは物語の中だけではなく、現代社会においても存在している。病院が近くにない地域などで、今でも多くの人が、ムガンガの治療の技術、または呪いの能力に頼っているのだそうだ。彼らの超自然的な力は人々の畏敬の念を集め、ドイツ領時代には、植民地勢力に対する反乱を主導するムガンガがいたほどである（マジマジの乱、1905年）。また、聞き取り調査をする中で、「ジンは想像上の生物だ」「目には見えない」と言う人がいる一方で、「ジンが見える人もいる」と言う人もいたことが印象的であった。ジンを見ることができるとして挙げられたのが、上述のムガンガとムチャウイである。彼らはジンを飼い、人を助けるために、あるいは人に害を為すためにジンを遣わすことができるのだと言う。

まとめと考察

スワヒリ民話世界において、人間が暮らす現実世界から切り離された「異世界」の存在は見られなかった。その代わりに、通常「異世界」における存在として見られる魔法使いや精霊も、人々の身近な場所に現れる存在として描かれており、現実世界と異世界の境界が曖昧、または区別がないような印象を受ける。また、呪術師であるムガンガは現実世界に実際に存在しており、また、ムガンガやムチャウイの手助けをする精霊・ジンの存在も、一部の人には信じられている。このように、現実世界と異世界（想像上の世界）の境界線が曖昧なのがスワヒリ民話の特徴である。

スワヒリ世界で、異世界が登場しない理由として、「自然との距離」が考えられる。民話の中で他界がある場所として多いのは、全世界共通して、川、海、森などの自然の中であり、人の力では制御しきれない荒々しい自然に対する畏怖の念が、人々に他界の存在を想起させるためだと言われている。他地域と比べて、人間界と自然界の距離が近ければ、現実世界と異世界の距離も近くなるのではないだろうか。スワヒリ民話が発達していった時代、人々がどのように自然と関わっていたのかを調べることで、民話世界の中で異世界がどのように形成されていったのか考察することを今後の課題としたい。

留学中の生活・研究でのトピックス



タンザニアは、アフリカ東海岸、赤道の少し下に位置している。美しいインド洋、アフリカ最高峰のキリマンジャロ山、国中に点在する野生動物の国立公園など、雄大な自然が魅力的な国だった。私が留学していたダルエスサラームは、タンザニアで一番の都市。国中から様々な民族の人びとが、勉強や仕事のために集まり、経済・文化の中心地となっている。

そんな大都市ダルエスサラームでも、生活面にはやはり不便なことが多かった。大学の寮では断水、停電が日常茶飯事。断水が起きれば寮の外のタンクからくんできた水をバケツにためて手洗いなどに使い、停電が起きれば懐中電灯の明かりで課題をしなければいけなかった。また、スリや強盗などの軽犯罪が頻発していて、少しの油断が犯罪被害につながる。私自身もひったくりの被害に遭ったし、空き巣や強盗の被害に遭った留学生もいた。こうした生活の不便さ、治安の悪さといった問題に直面する度に、ここは発展途上国なのだと改めて実感させられた。

困難も多い一年間だったが、帰国した今となっては、あれもこれも楽しかった記憶として思い返される。これもひとえに、現地の人たちとのあたたかい交流があったからに他ならない。異なる文化背景を持ち、肌の色も違う私を、タンザニアの人たちは珍しがりながらも快く受け入れてくれ、出会う度に挨拶をし、おしゃべりをしてくれた。渡航直後は、不便な生活に嫌気がさしたり、言語や文化の壁にぶつかって思い悩んだりすることもあったが、タンザニア人の明るくおおらかな人柄に支えられ、乗り越えることができた。

私の留学を楽ししいものにしてくれたタンザニアの友人たちには感謝している。Asanteni!!

今後の社会貢献

現地で様々なことを見聞きし、体験した今、本当のタンザニアについて、またはタンザニアの魅力について、多くの人に発信したいという気持ちが強くなった。現在、日本人のアフリカ理解は決して十分とは言えず、メディアの報道も「飢餓」「貧困」「紛争」といったネガティブなものに偏っているように思う。大自然や豊かな文化、現地の人たちの温かい人柄と言った魅力を伝えることによって、こうした偏見を取り除き、国際理解、国際協力への手助けをしたいと思っている。その手段として、現在は旅行会社への就職を考えて就職活動を行っている。タンザニアへ行く魅力的なツアーを企画することで、旅行者に実際にタンザニアに足を運んでもらい、観光地を訪ねたり工芸品をお土産として買ってもらうことで、日本人のタンザニアに対する理解を深めることができると同時に、現地の経済の活性化や文化振興にもつながると思ったからである。自分自身も、興味の幅をアフリカだけに狭めず、世界の様々な地域についての知識、多様な価値観を身につけ、周囲に発信できるようにしていきたい。